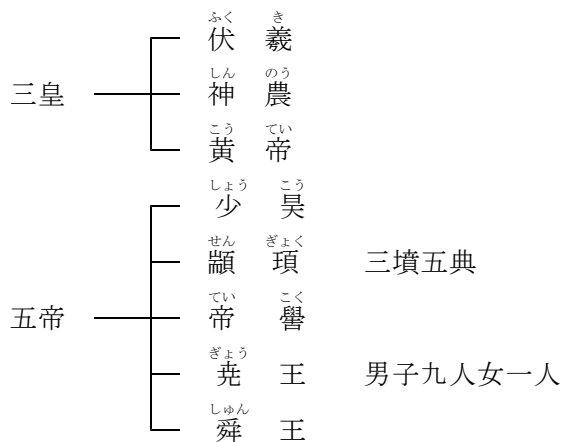


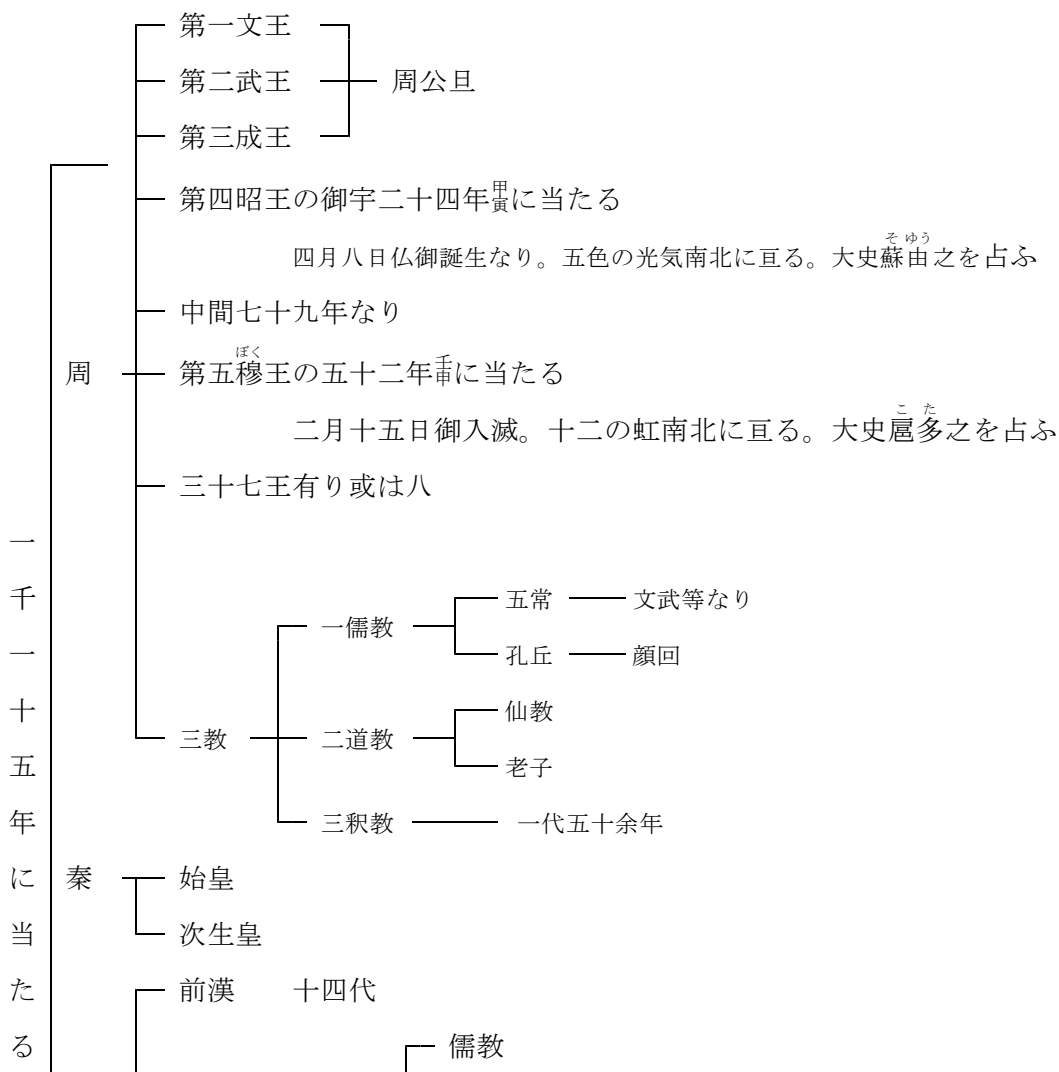
和漢王代記

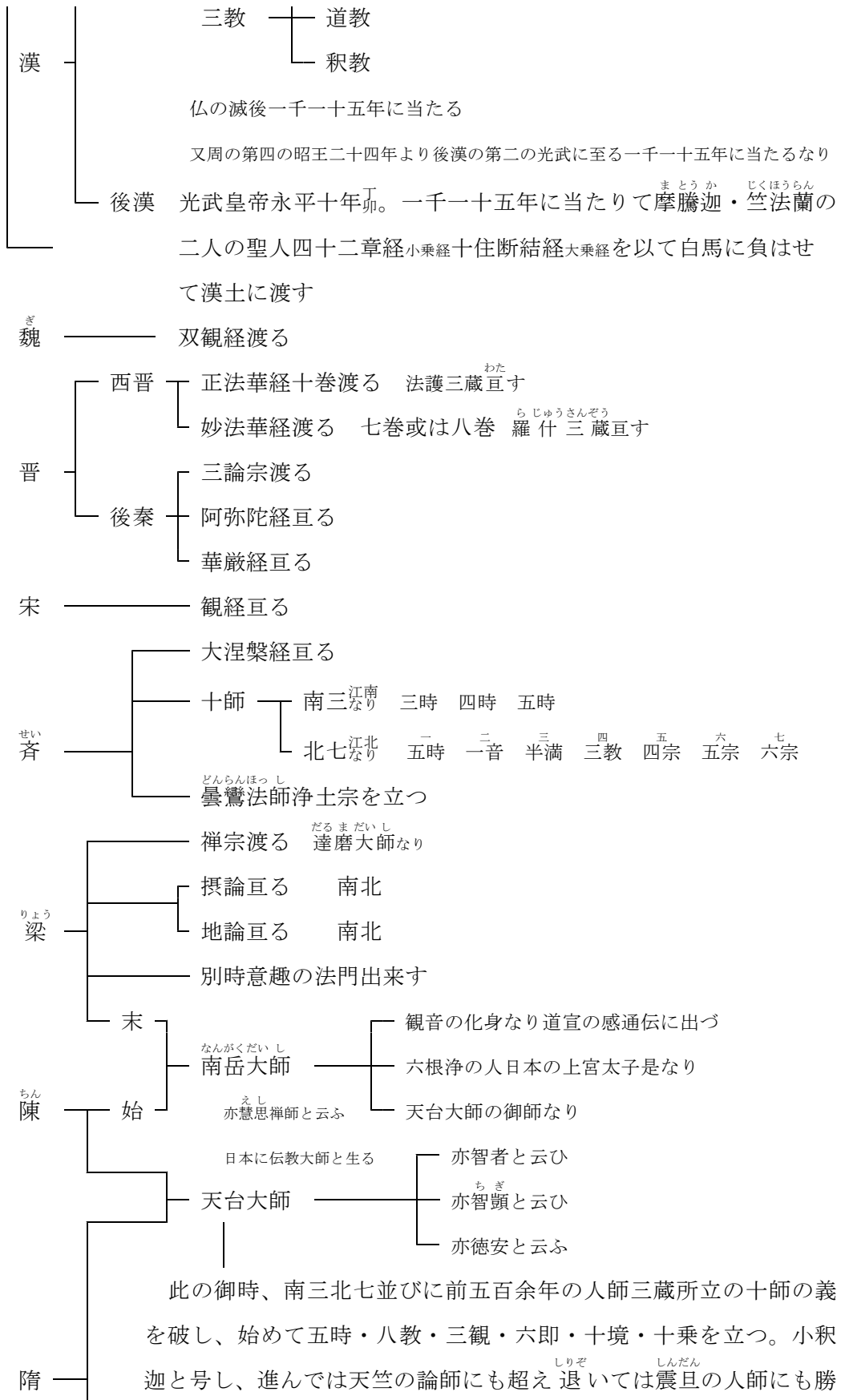
建治二年

五五歳



か
夏
いん
殷





れたり。

玄義の三に云はく、故に章安大師の云はく「天竺の大論、尚其の類に非ず。震旦の人師、何ぞ^{わづら}勞はしく語るに及ばん。此^{こよう}誇耀に非ず、法相^{しか}の然らしむるのみ」。

又智証大師^{授決集}云はく「天台世に出でて^{ぶつち}仏意を快く暢ぶ。豈^{あに}万教の再び世間に演ぶるに非ずや」。

笈多^{ぎゅうた}と崛多^{くつた}の両三蔵^{てんぼん}添品法華經を渡す

道綽^{どうしゃく}・善導^{ぜんどう}此の世に在り

華嚴宗

後漢の世より唐の神武皇帝、開元十八年^庚に至る六百六十四載に渡る所の經律論五千四十八卷訳者一百七十六人なり

妙樂は是の世の人なり

法相宗は玄奘^{げんじょう}三蔵^{さんざう}西天より之を渡す

真言宗は善無畏^{ぜんむい}三蔵^{さんざう}・金剛智^{こんごうち}三蔵^{さんざう}之を渡す

法相宗・真言宗の二宗は天台之を見ず、妙樂大師之を見て天台宗に對当して勝劣を論ず。又日本国の^{じかく}傳教・^{ちしやう}慈覺・^{あらせ}智証之を諍ふ

宋

天台の玄義の十に南北の十師を破して云はく「但^{ゆうおん}聖意幽隱にして教法^{いよいよ}弥難し。前代の諸師或は粗名匠^{ほぼ}に承け、或は思^{しゆうきん}ひ袖^{せんぱく}衿^{じゆう}より出づ。阡陌^{せんぱく}縦横なりと雖も、孰^{いず}れか是なるを知る^なこと莫^なし。然るに義^{なら}双^{ふた}び立^たたず、理^{ふた}兩^{ふた}つ存^た存^たすること無し。若し深く所以^{またしゆ}有^{たら}って復^{また}修^ゆ多^た羅と合^あする者は録^{ろく}して之を用^{もち}ひよ。文^{ぶん}無く義^ぎ無^なきは信^{しん}受^{じゆ}すべからず」。

籤^{せん}の十に云はく「一^{いつ}として全^{ぜん}く是^ぜなること無^なきを以^{もつ}ての故^{ゆゑ}に一^{いつ}々に難^{なん}破^ぱす」。

玄^{げん}の三に云はく「輕^{きやう}慢^{まん}止^とまざれば舌^{した}口中^{くちゆう}に爛^{たんだ}」。又云はく「法華^{ほふわ}は衆^{しゆ}經^{きやう}を總^{そう}括^{かく}す」。

籤^{せん}の三に云はく「已^い法華^{ほふわ}已^い前^{ぜん}の華^わ阿^あ無^む量^{りやう}義^ぎ濕^{じつ}槃^{ぱん}經^{きやう}等^{とう}の法^{ほふ}華^わ已^いの妙^{めう}、茲^{こゝ}に於^おて固^こく迷^まへり。舌^{した}爛^{たんだ}れて止^とまざるも猶^{なほ}華^わ報^{ほう}と為^なす。謗^{ぼう}法^{ほふ}の罪^{ざい}苦^く長^{ちやう}劫^{けつ}に流^{りゆう}る」。

南^{なん}三^{さん}北^{ぺい}七^{しち}並^{へい}びに華^わ嚴^{げん}宗^{しゆ}の法^{ほふ}藏^{ざう}・澄^{じやう}觀^{くわん}、真^{しん}言^{げん}宗^{しゆ}の日本^{にっぽん}の弘^{くわう}法^{ほふ}等^{とう}は法^{ほふ}華^わ經^{きやう}より華^わ嚴^{げん}經^{きやう}を勝^かるとするなり。又^{また}三^{さん}論^{ろん}の嘉^か祥^{じやう}は法^{ほふ}華^わ經^{きやう}より般^{ぱん}若^{じやく}經^{きやう}を勝^かるとす。又^{また}法^{ほふ}相^{しやう}の慈^じ恩^{いん}等^{とう}は法^{ほふ}華^わ經^{きやう}より深^{しん}密^{みつ}經^{きやう}を勝^かるとす。又^{また}真^{しん}言^{げん}宗^{しゆ}の善^{ぜん}無^む畏^い三^{さん}蔵^{ざう}・金^{こん}剛^{ごう}智^ち三^{さん}蔵^{ざう}・不^ふ空^{くう}三^{さん}蔵^{ざう}等^{とう}は法^{ほふ}華^わ經^{きやう}より大^{だい}日^{じつ}經^{きやう}を勝^かるとするなり。此^{こゝ}等^{とう}の宗^{しゆ}々^々の相^{しやう}違^い如何^{いかん}。相^{しやう}違^い如何^{いかん}。

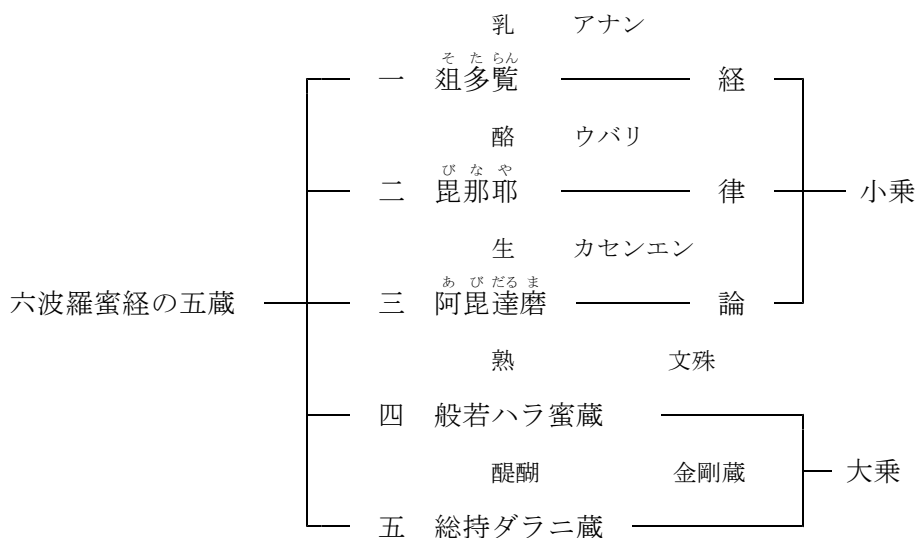
授^{じゆ}決^{けつ}集^{じつ}に云^いはく^え田^{でん}珍^{しん}智^ち「文^{ぶん}は大^{だい}經^{きやう}に出^いでたり、人^{にん}之^しを會^えすること無^なし。光^{くわう}は盲^{まう}の前^{ぜん}に在^あり

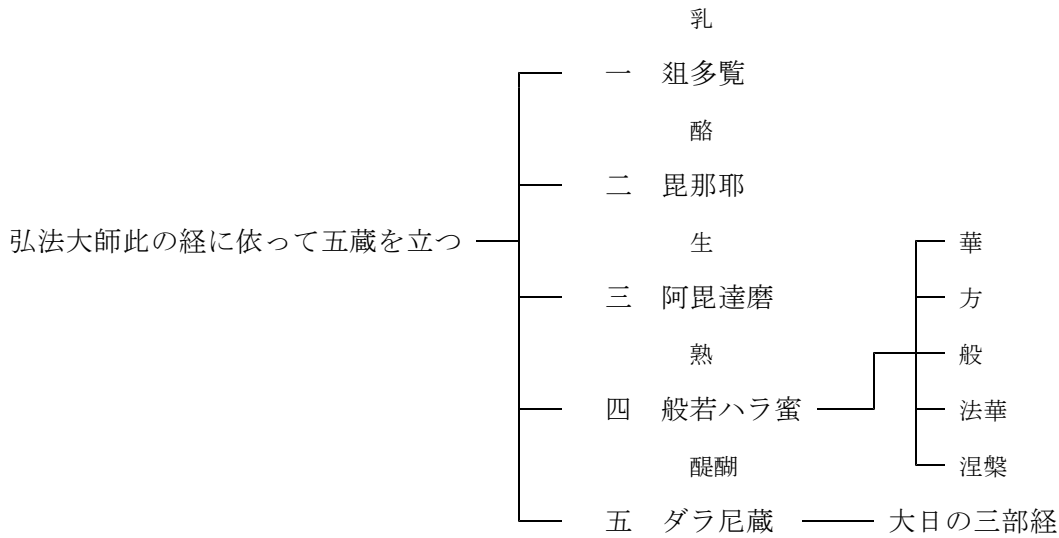
れども他に於ては無用なり。仏分明に五味の喩へを説き五時の教に喩へたまふ云云。訳有
 ってより 来、講者路に溢れども未だ曾て五味を談ずるの義を解せず、己が胸臆に任せて
 趣爾嚙語す。何ぞ象に触るゝ衆盲の者に異ならんや。天台世に出で仏意快く暢ぶ。豈万教
 の再び世間に演ぶるに非ずや。南北の講匠にして經論を積する者、各教時を立つれども
 百にして一も是なること無し。只教部の前後・頓漸・権実・大小・麁妙・寛狭・進否に迷
 ふに縁つてなり○大教の網を張りて法界の海に亘し、人天の魚を済ひて涅槃の岸に置く。斯
 くの如くするすら其の遺漏を恐る。況んや諸師の輩は羅の一目なり。何れの時にか鳥を得
 ん。若し万歳を暗んずと雖も此の理趣を会せざれば、年を終はるまで他の宝を計へて自ら
 半銭の分無く、虚しく諍論を益して長氷に水を添ふるのみ」。

授決集に法相宗の慈恩大師を破して云はく「五性宗の云はく、未熟法華論の前二と言ふは応
 に不熟と云ふべし○今謂はく、汎く法華を講ずるには 須く此の義を以て正と為すべし。
 若し爾らずんば經を破し論を破する罪五逆に過ぎたり。基公を除きて外は人の彼の不熟の
 義を伝ふること無し○若し強ちに之を執せば公私十方の信施消し難し消し難し。若し消
 せずんば何ぞ三途を免れん。爾を供養せん者は三悪道に墮せん。謗法の罪報は法華・般
 若の諸大乘經に一切明らかに説けり。智者は披くべし○爾之を信受すべし。無間を招く莫
 れ」。

授決集巴珍、真言等の諸宗を徴めて云はく「真言・禅門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等○若し法華
 ・華嚴・涅槃等の經に望むれば是接引門なり」文。又云はく「大底他は多く三經に在り。
 円の旨至って少なきのみ」。

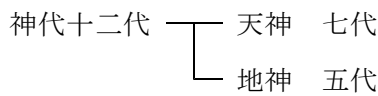
弘法大師の二教論に「喩して曰く、今斯の經文に依るに仏五味を以て五藏に配当す。総
 持は醍醐と稱し、四味をば四藏に譬ふ。震旦の大師等諍つて醍醐を盗み各自宗に名づく」。





二教論に云はく「^{しかのみならず}加 以、^{すす}釈教東夏に漸み微より著に至る。漢の明を始と為し周の天を後と為す。其の中間に翻伝する所皆是顕教なり。玄宗・代宗の時、金智・広智の日、密教鬱^{うつ}として起こり盛んに^{ひしゅ}秘趣を談ず。新薬日浅くして旧痼未だ除かず。楞伽^{りょうが}法仏説法の文、智度性身妙色の句の如きに至っては、^{くおく}胸憶に馳せて文を会し、^か自宗に駆って義を取る。惜しいかな、古賢醍醐^なを嘗めず」。

日本



人代百王 第一 神武天皇

之を略す

第十四 仲哀 八幡大神の父なり

第十五 神功皇后 八幡大菩薩の母なり

第十六 応神天皇 今の八幡大菩薩なり

略

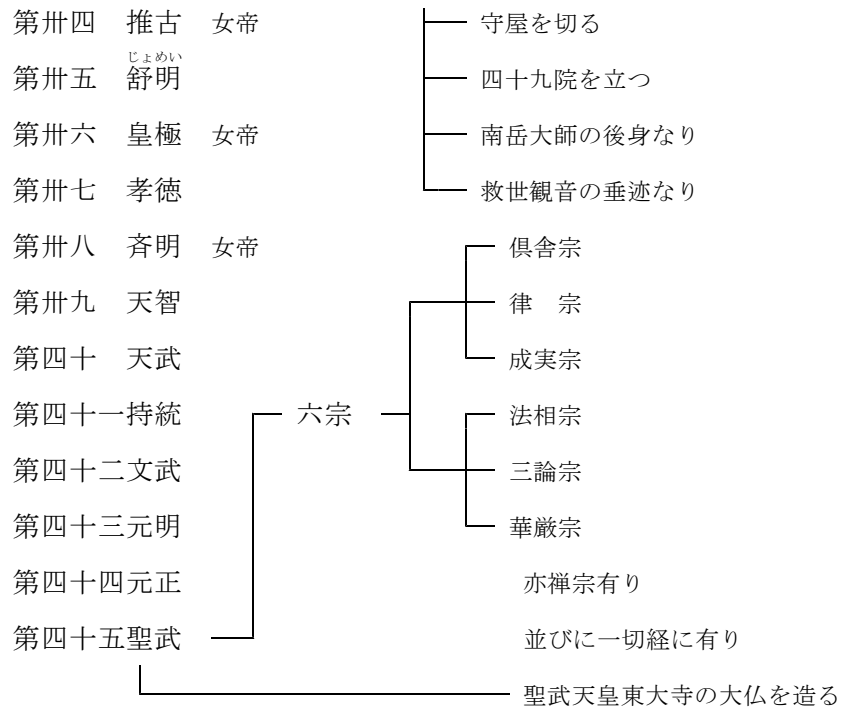
第卅 欽明天皇 歴記に云はく、欽明天皇の^{じてんか}治天下十三年^ち歳冬十月一日、百済国の聖明王より仏像経等始めて日本国に送る

第卅一 敏達天皇

┌ ^{うまやど}厩戸王子 ─ 四天王寺を造る

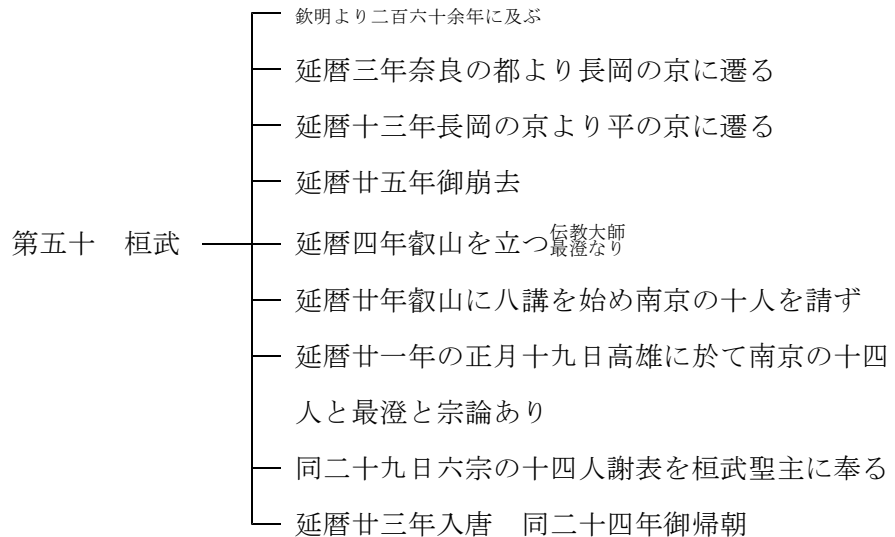
第卅二 用明 聖徳太子は用明の御子なり

第卅三 崇峻 ┌ 上宮太子



欽明より聖武に至るまで二百四十余年なり。震旦国より鑑真和尚がんにん渡りて律宗を亘す。次に天台宗の玄・文・止等を渡す。又東大寺に小乗戒壇を立つ。

- 第四十六 孝謙 聖武の女
- 第四十七 淡路 廢帝
- 第四十八 称徳 孝謙又即位なり
- 第四十九 光仁 桓武の父なり



此の御時始めて伝教大師天台宗を立つ。四十余年の文を以て六宗を破り、始めて法華の実義之を顕はし、欽明より二百

余年の邪義之を改む。

又六宗の碩徳たる勤操・徳円・長耀等の十四人桓武皇帝に謝表を奉りて邪見を翻す。

弘法大師空は延暦二十三年御入唐、大同元年御帰朝 伝教大師は山階寺の行表僧正の御弟子、弘法大師は石淵の勤操僧正の御弟子なり。

第五十一平城

第五十二嵯峨—— 弘仁十三年六月四日伝教大師御入滅。同十一日戒壇を立つ

第五十三淳和

衆

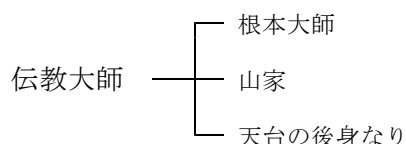
秀句に云はく「法華経を賛むと雖も還つて法華の心を死す」文。

撰択集法然に云はく「捨閉閣抛」。

善導の礼讃に云はく「十即十生百即百生」。又云はく「百の時に希に一二を得、千の時に希に三五を得」。又云はく「千中無一」。

導綽の安樂集大集月蔵に云はく「我が末法の時の中の億々の衆生は行を起こし道を修するも未だ一人の得る者有らず。当今末法は是五濁の悪世なり。唯浄土の一門のみ有りて通入すべきの路なり」。

慧心の往生要集に云はく「利智精進の人は未だ難しと為さず。予が如き頑魯の者豈敢へてせんや」。



守護章に「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り。法華一乗の機今正しく是其の時なり」。又云く「一乗の家都て用ひず小乗權大乘四十余年の文、但し開し已はって助道に用ふを除く」。